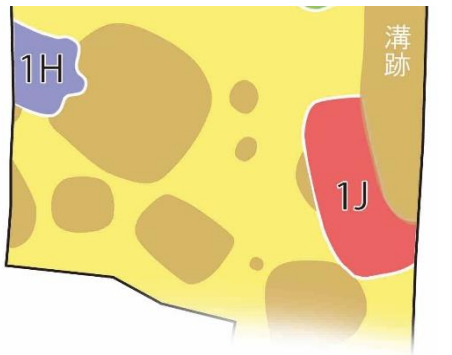
氷川前遺跡第99-1地点　発掘調査速報

― ⑧ 令和5年11月20日～12月1日 ―

作成日：2024.2.14
富士見市教育委員会
生涯学習課 文化財G

11月下旬にかけての調査では、縄文時代住居跡仮称1Jで検出された貝層の掘削・取り上げを行い、住居跡を完掘しました。
また、弥生時代の住居跡、仮称12Y・14Yなどでは住居跡全体の掘り下げ、平安時代の住居跡仮称1Hではカマド部分の掘り下げに入っています。

▲発掘調査の様子



1J（仮称）　完掘状況

（南西方向から）

（北西方向か

長辺が8.8m程度の、長方形の竪穴住居跡です。 住居跡壁面の少し内側には、壁溝と呼ばれる溝状の掘り込みと、多数の小さな柱穴がめぐります。

貝層を掘削している様子

縄文時代の住居跡、1J（仮称）では、縄文時代の人々が捨てた貝殻などが積もった層「貝層」を掘削し、住居跡を完掘しました。貝層にふくまれる貝殻は、ヤマトシジミのものが圧倒的に多数を占めているようです。取り上げた貝殻は遺物として持ち帰り、今後、洗浄と分析を行っていくことになります。貝層の中からは、貝とともに廃棄された縄文土器の破片も出土しました。

1H（仮称）カマド部分の掘削の様子

▲赤線部がカマドの痕跡。

▲1H（仮称）　カマド部分

◀カマド使用時のイメージ図

平安時代の住居跡、1H（仮称）の、カマド部分を掘り下げました。カマドとは、住居の壁際に粘土でドーム状のおおいを作って、その中で火を焚き、煙は住居の外へ逃がす調理施設です。日本列島では古墳時代から広まりはじめます。

今回検出されたカマドは、いずれも残存状況は悪く、一見して元の形をイメージすることは難しいですが、よく見るとカマドを構成していた白っぽい粘土や、火を焚いた部分が赤く焼けていることが観察できます。

この住居跡では、1軒にカマドの痕跡が、はっきりとわかるもので2、微かに残るものが1の、合計3箇所が確認されました。これらはすべてが同時に使用されていたわけではなく、破損などに伴って、何度か作り直された結果と思われます。

カマドによる調理